

■非言語コミュニケーションの役割

人と人のコミュニケーションを行うのは言語である、と考えるのはごく普通の判断である。しかし、最近の説によると、意思の伝達は言語コミュニケーションより非言語コミュニケーション(nonverbal communication)に依存することおのほうが多いという。たとえば、R. Birdwhistell によれば、全体のコミュニケーションの中で言語の占める割合はわずか35%にすぎないという。残りの65%は話し方、表情、ジェスチャー、動作など言語以外の伝達手段が占める。また A. Mehrabian によれば、言語の占める割合はさらに減少し、メッセージの伝達要素間には次の公式が当てはまるという。

$$0.07\text{verbal} + 0.38\text{vocal} + 0.55\text{facial} = \text{total}$$

全体のコミュニケーションは verbal、vocal、facial の3要素から成り、そのうち純粋な言語要素である verbal はわずか7%を占めるにすぎない。これにアクセント、声の調子、話し方などを示す vocal が38%加わり、顔の表情 facial が残りの55%を占める。

これを聴覚と視覚という別の角度から見ると、おもしろいことに気づく。Mehrabian の公式で見ると、広義の話し言葉を示す聴覚部分は verbal と vocal の二つから成り、コミュニケーションの45%を占める。これ以外が視覚部分であり、残りの55%を占めている。つまり、話し言葉で情報を得るためには、視覚の存在を忘れてはならないということである。それどころか、視覚のほうが聴覚よりも情報収集に対する貢献度が高いことを示している。このことは英語学習上、重要な示唆を含んでいる。

■オーディオ・テープだけの学習は効果が薄い

現在、英語学習、特に話し言葉の学習にはオーディオ・テープはなくてはならない存在となっている。そのため、ちょっとした英語学習プログラムにはテープが必ずついている。教材制作者も学習者もテープの有用性を信じて疑わない。しかし、この当然とも思われる考え方には実は問題があることは、上に述べたことから明らかである。もしこれが「音声」のみを扱う発音訓練のためのプログラムであれば、テープだけで十分であろう。しかし、もしこれが情報収集、つまり「意味」を扱うプログラムであるとする、オーディオ・テープだけでは不十分である。どうしても視覚的要素が必要となる。

■視覚教材は理解を飛躍的に助ける

従来、ビデオ教材のビデオ部分は飾り物、また挿し絵的存在にすぎなかった。したがって、ビデオは宣伝効果として役立ちとしては、英語学習の必須要素として主流に置かれる

ことはなかった。英語理解のためには、オーディオ・テープがあれば十分で、むしろビデオよりもオーディオ・テープのほうが優れているとする風潮が強かった。これが誤りであることは言うまでもない。

このことは日本語を使う日常生活を見ても明らかである。我々は話し手の表情を見、その態度を観察することによって、話し手が自分に好意を持っているか、悪感情を持っているのかを本能的に判断する。これは言語コミュニケーションを行う以前に確かめておかななくてはならない重要な手順である。この視覚による事前の情報収集という手順を踏まないで、直ちに聴覚による言語コミュニケーションに入ると、相手に対する予備知識がないためコミュニケーションの当事者に心理的な不安を残し、ひいてはスムーズな意志伝達の妨げともなる。言語コミュニケーション直前の視覚による情報収集は、いわば緊張感を和らげ、言語コミュニケーションを円滑にするための潤滑油の役割を果たしているといえる。

幸い最近ではテレビという強力な視覚・聴覚メディアの融合体がふんだんに利用できる。映画、ニュースなどの **bilingual** 放送は特に効果的である。たとえ最初は意味が全く分からなくても根気よく見続けていると、画面の助けによって、ある部分の英語が聞き取れるようになる。というよりは、英語を意識しないで、意味が向こうから飛び込んでくるようになる。これは画面を見ることによって情報収集が事前に行われ、その後に英語を聴くために起こる現象である。これはオーディオ・テープに聞き耳を立てる場合とは全く異なる。テープの場合には、事前の情報収集なしにいきなり英語を聞くので、その瞬間瞬間の緊張感を強いられ、そのために疲労感が残る。この疲労感を学習だと思ふ人がいるが、全くの誤りである。視覚を利用して、緊張感なしに意味を理解するのが自然な学習方法なのである。

©1993 Yukio Saegusa